新刊紹介

判比量論

神田香巌居士五十回忌の記念として、その秘蔵せられた古写本の中、仏教論典の断簡一点が、影印に付され、解説を附して刊行された。刊行のことは神田喜一郎博士の深厚な「仏恩報謝の志、令法久住の念」（序文）に出でる。影印製版・印刷のすぐれた技術はほとんど原写本を彷彿とさせるし、表紙・本文・解説にそれぞれ別漉の雁皮や鳥ノ子を用い、竹帙を摸した秀抜な意匠の揉紙の外套に収めるなど、体裁にも深い心が籠められている。

香巌居士（嘉永七――大正七）、名は信醇、京都の人。漢詩人として聞え、書画の鑑識に長じて京都帝室博物館学芸委員の任に在った。喜一郎博士はその令孫である。居士かつて、維新後の変動に遭った名家・巨刹から無数の古本の流出するを見、そのついに消亡するであろうことを憂えて、私財を投じて蒐集・保存に力められた。今回刊行のものもその中の一本に他ならない。

この断簡の内容が、新羅の名僧元暁の手に成った『判比量論』と題する論著の一部分であることは、富貴原章信博士によって確認された。この刊本に附せられた詳細な解説「判比量論の研究」も富貴原博士の執筆に係る。それによれば、この論は六七一年、元暁五十五歳の時の述作で、因明の形式を藉りて唯識の教説を論じたもの。すでに慧沼の『成唯識了義燈』（第七世紀末か第八世紀初頭）に引かれ、その外、新羅の太賀（第八世紀前半の人か）やわが善珠（七二三―七九七）・蔵俊（――一一八〇）らの諸著にその引用が見えながら、原本は散佚して久しく、わずかに末尾の廻向偈と奥書とだけが大日本続蔵経一・九五・四に収録されているに過ぎなかった。

この続蔵経への収録は、当時伊勢の箕作亀哉氏の所蔵に帰していた一断簡に拠ってなされたものと考えられる。それはまったくただ一片の零墨であるが古写経の逸品として早くから好事家の間で名高かったものらしく、既に文化七年にそれを摸刻した一枚刷が出された程である。明治四十五年五月刊行の『書苑』第七号にはこの断簡の写真が載せられており、久志本梅荘はその書体を評して「能く冥報記中の草体に似たれども、筆力更に一段の嬌健を加う。洵に独草の摸範とすべきものなり」と述べている。

今回影印に付されたものは、独草の妙をきわめるその書体および押捺された「内家私印」という古印から見て、右の断簡と一連のもの、すなわち同一写本の別な部分、に相違ないと考えられる、という。そして、かれが最末尾の一葉の截片であって載せる所は僅々六十字に満たぬのに比べて、これは第四紙から第六紙に至ると推測される三紙、百五行、約二千字に及ぶものであるから、本来二十五紙から成っていた（正倉院文書巻二四・二五二頁、巻一二・五三四頁）この写本にとってなおその八分の一弱にしか当らぬとは言え、この千載古逸の重要論典の面目を窺わしめるには十分なものがあるのである。『判比量論』が日本に伝えられたのは、色々な点から見て七四〇年より先立つ年であろうとい

うから、この写本はその後遠からぬ間に作成され、光明皇后（七〇一―七六〇）の紫微中台の経庫に架蔵されていたものと考えられる。

神田博士が、香厳居士遺愛の数多い古写本の中から、特にこの一点を選んで剞劂に付せられたのは、右のような稀有の内容と、秀麗な書体と、伝世の由緒とによる。

この本によって知られる限りの『判比量論』の立場が、護法正義の唯識学説、すなわち玄奘・慈恩の系統、を必ずしも承けていないことは、注目に値する。この本によって知られる『判比量論』の本文は、第七節の後半と第八――十三の六節の全部と、第十四節の前半とであるが、全文が存している中間の六節の中、第八節では証自証分を立てることの当否を論じ「当知、第四分有言而無義」とはっきりその存在を否定している。第十節では第八識は第七識をもって俱有依とするという『成唯識論』の説および慈恩の釈を批判して、第八識に俱有依無しとする。第十一節では声論師が声の常住を主張する論証式の中で「所聞性の故に」という因を立てるについて、それを難じた古因明師の説を挙げて、さらにそれを批判するが、そこにも慈恩の因明疏と異った見解が見られる。しかし第十三節では無性有情の問題を論じて、玄奘・慈恩の説と同じく、無性有情には大乗無漏智の種子が無いから成仏しないとしているように見える。元暁が元来華厳宗の人と見做されている点からはむしろ一切皆成仏の説をとるであろうように思われるのに、これはむしろ意外である。

長崎法潤氏の示教によれば、この論に見える因明の学説や方式は、陳那のそれをまさしく承けているものと認めてよい、という。玄奘より十七年後輩の元暁は、一度入唐の志を起して発足しながら中途で飜意して新羅に帰ったと伝えられるが、身は半島に在りながら、常に大陸の新仏教の空気を呼吸していたに違いない。『判比量論』にはその述作より僅か十二年前に長安において玄奘によって訳出された『成唯識論』を引用し、玄奘門下の文備・文軌の説を引き、また名は挙げないが慈恩の唯識述記を間接に引用して、因明の方軌に従って、それらの学説を検討している。その『判比量論』が述作後まもなく大陸に伝えられ、またわが国にも輸入されたことは先に記したこの論の引用から明らかに知られる。第八世紀の後半にわが国でこの論が大いに講読研究された跡は東大寺の古文書などによって窺うことができる。三国に亙ってそのように流伝した論典が、いま千年の歳月を隔てて、行き届いた配慮の下に、再びわれわれの身近に署かれることになったのは、言い表わしようのない喜びである。

（桜部　建）

〈昭和四二年九月神田喜一郎発行、2＋12＋76頁、非売品〉